

---

# 小さな箱

沖田蓮華

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小さな箱

### 【Nコード】

N6548S

### 【作者名】

沖田蓮華

### 【あらすじ】

設定では一応、小さい子どもの目線になって描いています。小説でもなんでもありません。そしてこれで終了です。

（前書き）

ある日、自分の部屋に置かれている『小さな箱』が目につきました。

自分が望んで持っているわけではなく、気付けばそこにありました。何の変哲もない、むしろ不思議なくらい飾り気のない箱です。しかし心が惹かれました。

小さな箱がありました。

ふたを開けると音が流れてきました。

聴いたことがないと解かっているながらも、どこかで聴いたことがあると感じさせるメロディーでした。

根源となるモノを一目見ようと奥を覗くと、何もありませんでした。

あるのは暗い闇だけ。

では音はどこからきているのか。そもそもこの箱に底はあるのか？

好奇心に急かされ手を伸ばすと、あるはずの底はやはり、ありませんでした。

すぐそこにあるはずの底がないのです。

しかしそうしている間にも、音は流れ続けています。

不思議

その言葉だけが、心身を突き動かしていきます。

そっと手を引き、再び奥をみると、

先程と変わらない闇だけが広がっていました。

そろそろ飽きてきた頃、その闇に変化が訪れました。

光がみえたのです。

1つだったその光は、2つ3つと増えていきます。

しだいにそれが、「星」だと、根拠もなく気づきました。

その光が増えるにつれて、目が輝いていくのを感じていました。

気付けば音が止んでいます。

しかしそれに気づくと同時に、たくさんあったはずの星たちが、続々と消え始めていました。

慌てて手を伸ばし、すくい取ろうとしましたが、何故かすり抜けていくのです。

逃げるように

星たちはあつという間に消えてしまい、再び闇が広がっていききました。

まるで闇が全てを飲み込んでしまったようでした。

目の輝きはすっかり失せてしまい、先程まで止んでいた音が耳に届いてきました。

懐しかったはずのメロディーは、悲しく、止まることなく永遠と響き続けました。

永遠と

それからいくつか年を重ねたある日、気づきました。

この箱は人の一生、だと

質素で飾り気のないその箱は、これといって特別な事などないこの世界を表し、

懐かしく思わせるメロディーは愛を表現していた。

それが何処から来ているのか解からないのは、己がそれに気づいていないから。

そして、その気づいていない者を闇とし、時々現れる希望を「星」と表現している。

「星」があるあいだ音が止まるのは、「希望」に夢中になり愛を疎ましく思っから。

そしてその希望が消える時、再び闇が広がり、メロディーが耳に届く。

すぐそこにある愛に、なかなか気づくことができない。

そんな人間の一生を、この小さな箱は、表現しているのだろうと

（後書き）

最後は、少し時が過ぎてからのお話です。

自分は何もしていない、何も成長などしていないのに、時間は簡単に過ぎていく。いつそ、さっさと死ぬ時になればいいのに……。

そんなある授業中に、ふと思い浮かんだフレーズ。

それが、『小さな箱がありました』でした。

そのまま、思いつくままに描いていった「小さなお話」です。

楽しんで頂ければ、幸いです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6548s/>

---

小さな箱

2011年4月24日10時15分発行